

## 函館ワンニャン物語 ⑧ ～ムック 2～

### ◆小雨の中の散歩（春の大森浜）

洋一が、三頭の大型犬（ラブ・クロ・ムック）を連れ、大森浜を散歩している。雨の中を散歩する時は決まって瀬川瑛子の「函館の雨はリラ色」を口ずさむ。

洋一『うれしいときも涙が出ると  
おしえてくれたあのひとと  
いっしょにぬれた朝の雨  
おもいだします大森町の  
白い渚にしみとおる  
ああ 函館の函館の  
雨はリラ色』

三頭の犬を連れ散歩する洋一。  
洋一と犬との時間が静かに流れていく。  
やがて洋一は、三頭の犬とともに自宅に戻る。  
玄関先で犬たちの足を洗い、バスタオルで一頭ずつ足を拭き、家に入れる。  
最後にムックの足を拭こうとした時、ムックが異様な鳴き声を上げる。  
あわてて、足を調べるが異常は見当たらない。

### ◆館岡家宅居間（その日の夕食後）

洋一「今日、散歩が終わった後で、ムックの足を拭いたらさ、こいつ変な声を出して鳴いたんだよな。気になって、足の裏も調べたんだけど……。何ともないとは思うけど、何か気なってるさ。」

傍にいるムックの頭をなでながら、聖子に話しかける。

聖子「気になるんだったら、明日にでも病院行ってみる？」

洋一「うん。そうしてみるか。」

二人で、黙ってムックを見つめる。

#### ◆動物病院（診察室）

簡単な診察の後、レントゲン撮影をし診断がくだる医師の表情は曇っている。

獣医「難しい病気かもしれません。」

洋一「難しいというと、どんな病気ですか」

獣医「まだはっきりはしませんが、骨肉腫の疑いがあります。左足の付け根に、影らしきものが見られます。」

聖子「骨肉腫って・・・。」

獣医「これから、血液検査をしてみます。その結果を見てから、またお話します。」

洋一「はい、よろしくお願ひします。」

診察室から出る洋一と聖子。

二人の間に沈黙が続く。

やがて洋一が顔を上げ、おもむろに口を開く。

洋一「骨肉腫なら、助かるのは難しいかもしれない・・・。」

聖子「骨肉腫じゃないかもしれない・・・。」

洋一「そうだよな。」

二人は祈るような気持ちで、診断を待つ。  
やがて、診察室に再度呼ばれる。

獣医「残念ですが、やはり骨肉腫です。」

洋一「骨肉腫・・・、ですか。先生・・・。」

聖子「先生、助かる方法はありますか。」

獣医「助かる可能性はあります。もしまだ転移していなければ、左足の切除でどうにかなると思います。」

洋一「切除と言いますと？」

獣医「左足の付け根、関節部分から足を切断し、患部を除去することです。かなり大がかりな手術になります。」

洋一「切除すると、ムックは助かりますか。」

獣医「開いてみて、患部がどのくらい進行しているか、また転移していないか、その状況によりますね。」

聖子「どうしよう。」

洋一「このままだと確実に命にかかわるんだから、手術してもらわないじゃないか。先生、よろしくお願いします。」

洋一に続き、聖子がすすがる思いで言う。

聖子「先生、どうか、どうか、よろしくお願いま

す。」

獣医「分かりました。やってみます。」

◆五稜郭公園（ムックの手術から一週間後）

三本足で、ラブとクロと一緒に散歩するムックの姿がある。

洋一がラブとクロを連れ、聖子がムックを連れている。

洋一「ムック、器用に歩くよな。三本足でもちゃんとついてくる。すごいぞ、ムック。」

聖子「ムックとこうやって、散歩できるのもあとどのくらいでしょうね。」

ムックの手術は、成功していなかった。

進行具合も予想以上に悪く、しかもすでに転移していた。

限られた日々をどのように過ごさせるのか、3本足でもけなげについてくるムックを見ながら、「せめて最後まで」と、強く心に思う洋一と聖子である。

しかし、その三週間後、ムックは静かに逝ってしまう。

洋一の脳裏に義母の言葉がよみがえる。

「私たちの病気を背負って逝ってくれたのね。」

ムックは、家族の誰かの身代わりに骨肉腫になってくれた。

そして、身代わりに逝った。

（「函館ワンニャン物語 ⑨」へ続く・・・）